

坐に先立つて

素直に只聞いて下さい。坐禅の目的は悟ること。本当の自分を知ることです。自分はこの俺が一番よく知っている、誰もが自負している筈です。何かの縁に囚われた途端に感情が乱れ、にっちもさっちもいかなくて苦しむ。道理では納得した筈の自分が、些々たる事で惑乱葛藤してしまうこの事もよく分かっている筈です。又如何に知的に理解したとしても、平安安定とは全然関係ない事実を、幾度と無く体験している筈です。そうした自分ではなく、いつも淡々とさらさらとした、拘りのない自分でありたいと願っていることも知っている筈です。言うなれば、不安定な自己矛盾を幾ら理解出来ても何にもならない、と言う事も知っているのです。

本当は波風が起きない、確固とした自分であることをみんな欲しているのです。そこで悩み苦しみのない絶対存在と言いますか、囚われのない大きな心に成れるのか成れないのか。有るとして、如何にしたら得られるか。それを本当に可能にする方法は如何なる道か。

確かな方法も道も有るのです。方法その一は、本当の自分を知らないのに、分かった積もりで放過している。この過ちを正すこと。本当の自分を知ることです。心の正体を体得する事で解決するのです。束縛や囚われから免れるには、心の解決しか無いのです。是れを「見性」又は「見性する」と言うのです。達磨大師は「直指人心見性成佛」と言われました。人の心を直指して見性すれば成佛と言う事です。成仏とは達成とか成功とか到達と思えばいいです。

では心の正体は如何なる者か？ 誰もが知りたい絶対課題です。これを一大事因縁と言います。人皆喜んだり悲しんだり、怒ったり苦しんだり、考えたり比較したりして絶えず躍動していますが、どれ一つとして留まったり残ったりしてはいない。自分の心を観察しこの事得心する事です。発露した瞬間に終わっていて、綺麗に消えて無いです。だから次の作用が新たに展開が出来るのです。もし残っていたら、まず前の心のリセットしてからでないと心が使えないでしょう。でも本来はそうじゃない。心は縁に応じて現れて、即消えて何も無い。瞬間に現れるが、次の瞬間には消滅して無くなってしまう。有ってしかも無い。有即無、無即有です。これが心の本質なのです。この事、空である事を本当に体得するのが仏道修行です。

ところが一般は思考思念と言う形で連続している、と感じているはず。瞬間に消えて無い、と実感している人は先ず居ないでしょう。自覚出来ない程のスピードだからです。間髪を入れず次が出ているのです。それに加えて情報化即記憶装置に焼き付けていますから、どうしても切れているより連続していると思えないのです。実際は瞬間瞬間、全て切れており、消えているのです。

辛い時には辛い、嬉しい時は嬉しい。その時はそれしか無いのですから、常にその者それです。「今」の自分、次の「今」の自分と、変化しつつ、その「今」ありのままの自分ではないのです。過ぎ去った自分などどこにも無い。有るのは「今」の様子だけです。有って無いその事実を体得して、これで良しと決着する為の修行です。隔てが無くなったその瞬間から、迷ったり逃げたり囚われたり、探したり求めたりしていた自己が無くなるのです。だからすっきり安心するのです。この本来の自分を、本当に体得するのが禅の目的です。

この無上の世界に、誰もが、間違ひなく到達できる方法が確かに有るのですから、確かな方法に従っ

て修行すれば結果が出るのです。

迷いや葛藤、苦しみの本は心身の「隔たり」です。身心一如であれば自我は無いのです。従って「隔たり」を解決すれば済むのですが、一旦「隔たり」を起こしてしまうと、その瞬間から知・情・意が分離してしまい、自己としての塊、つまり拘りを起こす回路が固定してしまうのです。別から言えば、何でもかんでも全て思考上で加工してしまい、自分の納得し易い状態に情報化すると言つ事です。この機能とシステムが恒常化した様子を自己とも自我とも言つのです。拘りとなり囚われとなる厄介者の正体です。

従つてこの情報化する自己が有る限り、「隔たり」もまた温存しているので、決して身心一如の端的にはなかなか戻れないのです。何故かという、直ぐ情報化する機構なので、意識以前、意志以前、認識以前に既に心は或る傾向に囚われていくからです。その速さは意識の数十倍、エネルギーは更に巨大ですから、知性などでは話にならないのです。要するに考え方や認識の仕方を変える程度では、「隔たり」を解決し身心一如に戻す事など、靴を隔てて痒がりを搔くです。全く歯が立たないと言つ事です。だから正しい方法でない限り絶対到達し得ないのです。

その境地を得るには坐禅が一番近道なのです。勿論坐禅ばかりではなく、何でも一心不乱に「只」すれば同じです。「只」とは純粹です。不純物が無い事です。本当と言つ事です。何でも本当に、本真剣になつてするのが禅です。している時、内から妨げる不純物が出てこない迄に真剣に取り組むのです。即ち一つの事に同化するのです。成り切つて徹する事です。不純物とは心の癖です。貪瞋痴となつて現れるものです。これが無くなつた人を仏と言つのです。この癖を取るのに坐禅が最も良い方法なので、祖師方がこぞつて奨めているのです。

分かりやすく言えば、一息に徹するのです。坐禅に徹すればいいのです。一步に徹することです。余計な気遣いをしないように、何も考える事がないように、静かな部屋で静かに坐禅するのです。姿勢を正し、心身を統一させる。そうすると、知情意が自然に折り合つてくるのです。考える必要がないのですから知性が静まつてくる。感情も次第に穏やかになつてくる。心の揺らぎが取れてくる。自然に一息に治まつてくる。そして一息ばかりになつてくる。一息も忘れ切るまで徹するのです。自ずから身と心とが一つになつて、我を忘れる時がくる。忘れるとは、知的行為も感情も一切が溶け込んでしまい一心に成る事です。その物自体になるのです。要するに自己を超える事です。これを禅定と言ひ、只管と言つのです。只管とは純粹、一心と言つ事です。囚われるものが無くなる事です。不純物が無くなると真実が露わになり、こちらに入つてくるのです。真相を自覚する時節が来たのです。この自覚が一大事因縁であり最も大切な証です。仏道の命です。

要するにこの「道」「法」を早く獲得する為には、強烈な菩提心の本に、師を信じてがむしゃらにやることです。一時間でも三十分でも坐禅する時は、後先きかまわずに坐禅することです。どうなつても良いと覚悟することです。そして、心の全てを捨てて一生懸命にすることです。「只」吸い、「只」吐く。何もかも忘れてこれをひたすら繰り返しておればいいのです。

こんな事は大馬鹿にならねば出来ません。代表格が達摩大師です。ストンと坐つたらそのまま。ただ坐るだけ。坐禅そのものです。だから坐禅しておるといつ自覚をもたらす自分が無い。つまり、心意識や念想観即ち心を用いてないから、時間観も無いのです。あつと言つ間に昼が来る。あつと言つ間に夕方来る。そうやって九年間、真箇の「只」を示された。これが坐禅の標本です。

六祖慧能禪師は、応無処住而生其心の一句で一雙眼具した。あつと驚いたに違いない。本当の自然は「只」だった。初めからこれで良かったんだ。と決定が付いたのです。心なんて何にも無いのに、色々な意識や、様々な感情が、縁に依つてころつと出てくる。そしてころつと消える。何の囚われも跡形も

無い。何も無いのに手足が自由に動いている。何なのかなあ。この自分とは一体何なんだろうかと。

日常淡淡々と仕事に精を出して居た事は、一般と同じです。只、真面目さと純粹さが人一倍有った為に、知らずして一心不乱になっていたし、「只」していたのです。折々に縁に依って現れる心的現象に気が付いて、

「妙な者が現れたり消えたりしているな、と気が付いた時には既に出ている。これは一体何だろうかと？」
と思つた時には既に消えているが・・・」

この得体の知れない不思議な存在が、平素何と無く気に掛かっていたのです。だから、応無処住而生其心の金言に触れた途端、「あつーやっぱりそうだったのか！」と臍落ちして、確かに決定し安心したが、途方もない世界に驚き、同時に歓喜が込み上げてきて、この一大事の様子を本当に分かつてもらいたい。そしてそれが何なのかを点検してもらいたい、と切なる思いに駆られたのです。その為に母を捨てて五祖弘忍禅師の処に行きますね。五祖は逢うなり、彼は既に一隻眼具しておると看破し、素晴らしい器の出現をどれ程喜んだ事か。一般大衆の中へは入れず、米つきを八ヶ月間させて悟後の聖胎長養をさせたのです。朝から晩まで米つき三昧です。単純な事が、何心なく、全身そのものになって朝から晩迄「只」やれる様になつたら本物です。もうその人です。大悟の境界に到つたのです。遂に六祖と成られたですね。

応、燈、関と言えば坐禅する人で知らぬ者はいません。その有名な大燈国師は、二四にして大応国師の元で大悟する。それから、小さな庵に入つて「只」を鍊る。もくもくと草取りをしている様子を見た夢窓国師は、「我が門流の者は、そのうち彼の道風になびく時が来るであろう」と賛美していますね。非常に頭脳明晰な上に勝ち気で何事に付けても積極的な性格だったのです。大燈国師の国師たるところは、無我の働き故に徹底法であり単であり「只」であつたが、大法の上から見れば、この天然の様子さえも陶冶すべきだとして努力されたことです。そのために五條の橋の下の乞食の中に入り馬鹿を鍊るのです。単を鍊るんです。二十年も練つて練つて練り上げた祖師なんです。遂に後醍醐天皇の師匠に成られた方です。

単の極が無我です。素直の極が無我です。本当の単、徹底素直です。無我になるためには、我を捨てればいい。我を捨てるためには、単一つになればいい。一つになるには、単純なことを単純なまま、なんの意識も批判も計らい事もなく、その物に任せ切つて、淡々とやっておればいいのです。何事もそうしておればいいんです。計らい事なしに、大自然のままに「只」やれる様になる。その事を気づかせるために、只管打坐を奨めているのです。達磨大師のように、六祖のように、大燈国師のように、単を鍊り馬鹿を鍊るのです。

実修行に於いては、無用な我慢は却つて良くありませんから、足や体の苦痛などは形を変えて解消し、本命の坐禅に陶醉すること。大馬鹿になつて、死にも狂いでやることです。一息を死にも狂いでやるなんて、大馬鹿にならないと出来ないのです。大馬鹿というのは知性の計らい事やら、諸々の感情一切に関わらぬ事です。一切の心を捨てて没頭する事です。いきなり大馬鹿になつたら、いきなり求心が無くなるのです。それが一番早いのです。「道」「法」を得る一番の早や道です。では。

学道用心集 提唱

いよいよ最後の第十章、「直下承当の事」。これで完結です。「只」聞いて下さい。分かるうとせず、耳に任せ耳を忘れて空っぽになつておる事です。悉く空することです。

本文

第十、「直下承当の事」

「有。身心を決択するに、自から兩般あり。参師聞法と、功夫坐禅となり。聞法は心識を遊化し、坐禅は行 體を左右にす。是を以て佛道に入るに、尚ほ一を捨てて承当すべからず。夫、人は皆な身心あり、作は必ず強弱あり。勇猛と味劣となり、動也た容、此の身心を以て、直に佛を體す、是れ承当なり。所謂従来の身心を回転せず、但だ他の體に随ひ去るを、直下と名くるなり。承当と名くるなり。唯だ他に随ひ去る、所以に旧見に非ざるなり。唯だ承当し去る、所以に新興に非ざるなり。」

これが学道用心集の結論です。何時も結論です。有句無句共に夢事無駄事だと言う事を知らしめるためです。さて、無駄事に蛇足を付けてみます。この慈悲落草の有り難さを看取し感応道交したら、道元禅師も無上の喜びを隠せず地下から踊り出ますよ。痛快ではないですか！

「有。身心を決択するに、」

決択は決着です。心身が隔たつておるとどうしても囚われ葛藤する。心が妄りに浮遊して、知性や感情を刺激し惑乱する。迷い苦しみは此処から起こるのです。諸悪の根元です。それを本来の身心一如に戻して決着をつけるのが仏道であり修行です。決着が付いた瞬間に一切の苦厄が草露の如く空に帰すのです。これで人生の大綱を得、大安心の人となるのです。本来に目覚めて決着することを脱落と言います。要するにこれは「隔たりを取り、身心一如に目覚めるには」と言う意味です。

「自から兩般あり。参師聞法と、功夫坐禅となり。」

その為には絶対必要条件が二つある。それは、参師聞法と功夫坐禅です。参師聞法というのは、師に参じて正法を聞く事です。良く聞いておかないと、本物の金貨とビール瓶の蓋との見境がつかない。これだと思ひ込んだ物がビール瓶の蓋だったり、或いはダイヤモンドなのにガラス玉だと思つて捨てたりする間違いを起こすから。だから師が必要なのです。無駄や間違いを防ぎ、最短で本物を体得する道は参師聞法からです。その一方、聞いた通りをとにかく実践をしなければ、会得する事が出来ませんから、功夫坐禅・弁道精進が必須です。

功夫に当たつて、道元禅師は計らい事なしにする事の大切さを頻りに説かれました。純粹にやること。「只」する事。私を用いない。意識を用いない。純粹に努力する。単純に成り切る。全身を全拳して一心不乱に坐禅する。これが功夫坐禅です。参師聞法と功夫坐禅を抜きにしては、「道」「法」は得られない。間違つても文字言句に囚われず、この二大要素を絶対条件としてやれよ。と言つのが「自から兩般あり」です。この「自ずから」は、「道」「法」は本来であり絶対だから問答無用だ、と言つ意が底にあるのです。

「聞法は心識を遊化し、坐禅は行 體を左右にす。」

法を聞きますと、心は**応無処住而生其心**であることが分かる。今しかなくて、出てくる所も、消え去っていく所も無いもの。只縁に依じてパツと現れてさつと消えて何も無い。何者かさっぱりその正体が分からない。が何時でも何処にでも縁と共に有るのです。これが心です。(老師がパンと手を叩く)この音が皆さんに(パン)と現れる。主も従もなく、なんの準備も段取りもなく、いきなり現れる。これが心であり道です。こつ言つ真実は聞かないと分からないでしょう。

全体どんな心もどれも全部自分の世界です。内側で幻の如く起こつて草露のように消えておる。心とはそんな不可解なものか。自分というの、そう言つ不可解なものか。とは言いながら、何にも跡形が無い。となると、心も自分も、有つて無い。無くて有るものと言つ事が分かる。となると、縁に依つて自分の姿、心の様子が無限に変わつて居るこの「今」しかない事も分かる。こつ言つ事を聞いてよく知つておきなさい。そうすると、心が自在に遊び廻つておつても、それに取り付かなければ、迷つ事は無いので救われるから。心は心のままにしておけばよいのです。手を付けず、理屈で知ろうとせず、何とか自分の都合の良いようにしようと思つて、そのまま自由にしておくのです。ころつと放つておけば何も災いしないのです。惑乱する事はないのです。心の俛であれば初めから救われているのです。色んな姿形になって遊び廻りながら一向に跡形が無いのは、何も実体が無いからです。縁に従つてころころころ転変しているだけです。だからそれ自体をどうもせず、そのままにしておきなさいすれば良いのです。それ自体の性として忽ち消えて無くなるのです。本もと塊者が何も無い証拠です。この事を釈尊は、**応無処住而生其心**と言ひ、**道元禪師**は一步進めて、「**聞法は心識を遊化し**」と。参師聞法することそのことが初めて分かると言われたのです。

坐禅とは坐禅、これだけでしよう。これそのものが行でしよう。行でもって行を証明しておる。坐禅が坐禅を証明しているのです。だから坐禅ばかりになつて、坐禅は坐禅だと体達すれば良いのです。思う必要も、更に求める必要もない。捨てるべきものも無い。この事を本当に、坐禅に成り切つて計らい事が取れた時に自覚出来るのです。やっぱり祖師が言つていた通りだったんだ。聞いた通りだったと分かる。本当に坐禅をしなければこの大事な真相が分からないのです。「左右にす」というのは、自由自在にすと言つ意で、体得することです。また見方を代えれば、これをちゃんとしなかつたら、道は左右至る所にあつても得られないぞ、と言つ意味でもあるのです。

「是を以て佛道に入るに、尚ほ一を捨てて承当すべからず。」

この様に「道」「法」を得る方法は明らかなように、参師聞法と功夫坐禅との両輪があつて初めて可能なのだ。得るには片っぱいだけでは駄目だ。聞くだけでは得る者はないし、坐禅すると言つても方法無しでは間違いを起こすから駄目だ。「尚一を捨てて承当すべからず」です。底意は、正しい方法をよく聞いてからやれということなのです。

「夫、人は皆な身心あり、」

三度目の「夫れ」です。そうですね。もう既に説き得て充分です。これ以上の講釈は法を汚す恐れがあります。

「作は必ず強弱あり。」

「作」というのは作用、発動、機能です。強い人も弱い人もおる。早い人も遅い人もおる。これ人々持ち得た心身の縁の様子です。色々だと言つ事です。一つとして同じものは無い。個々を大切にせよです。

「勇猛と味劣となり、」

勇猛とは命懸け、又猛烈です。一方は味劣鈍重です。気力体力の多い人と少ない人も居る。努力の続く人続かない人も居る。それなりに一生懸命真面目に真剣にやればいいのです。猛烈な人は二三日不眠不休、命懸けでやれるのです。瑞巖寺開山の法身国師ほくしんは、もと草履取りの真壁まかへの平四郎です。主君政宗公に草履で頭をぶん殴られて、怒り心頭に達した。その怒りを菩提心に変えて支那に渡り、無準禅師について苦心惨愴。遂に大悟して祖師となった日本の誇るべき弁道の人です。又井原の平四郎は三日三晩でぶち抜いた。勇猛の代表格です。そのような条件を先とせず、身体も弱く氣迫に乏しい人もそれなりに、純粹に真面目に、一生懸命やっておればよろしいと言つ事です。強烈勇猛でなければいけないと、無理矢理に弱い人にやらせると心身を壊してしまつ。その人なりの縁に依じて、真剣にやりなさい、それが「道」「法」なのだ。

「動也た容、」

動とは能動積極な自発力であり働きです。即事に当たり縁に従つ事です。動いて事に処するを動といふのです。即作用することです。容は事の次第を素直に受け入れる。音のままに、目のままに「只」在る。縁も外の縁と、こちらの内側である見聞覚知の縁とが有るように、分けて見れば縁と縁との出会いの作用に動と容が有るのです。私が時として「これ何ぞ！」と手を叩いて試みますね。是れは「只」是れ、この事が分かっている人は、即手を叩く。尋ねられた事に素直で在れば、その縁の俛に手を叩くも又自然であり道です。是れが道元禅師の言われる「動」です。

一方に於いては、本当に「只」在る時、「只」見、「只」聞いているだけの時、「これ何ぞ！」の音声のみ。手を叩く影像が眼中に有るだけ。自己が無いので何の反応も無いのも自然です。どちらも道です。ただ不明瞭による無反応とは雲泥の違いである事、以て知るべしです。見るばかりの時、聞くままの時、自己無し。反応の無いままを錬れば早晚法縁有りです。「動也た容。」反応したりしなかったり、動いたり動かなかつたり、とにかく一切合切みな「道」「法」です。動の時もあれば容の時もある。どちらも道であり、時の様子に過ぎないので、如何なる様子も是非してはならないのです。「動也た容」のままに既に「道」「法」ですから。

「此の身心を以て、直に佛を證す、」

これら多彩な働きをする身心。身心が有する全ての機能。機能が縁に依ずる動也た容。一つとして漏れることなく、全てが直にそのまま仏である。この事を体得せよ。直下承当せよと。

仏とは何ぞや。自己無き事です。「只」「只」の人です。その事のみ。余念の無い事です。その物と同化して「隔たり」の無いのが仏です。見たままです。聞いたままです。間違いようがないでしょう。

仏を出して見せよと迫つたら、或る祖師は、ひょいと自分の指を立てた。この間、何者も無い。宇宙総ぐるみだから手が付かぬ。自己を求むるに不可得です。また趙州古仏が、有りや、有りやと詰問した。仏が居るか居らぬか、この事が分かっているか否かを試したのです。したら、にゅっと腕を立てて間に合わせた祖師が居ます。そのもの一つになって自己が無かつたら皆仏です。その消息を体得する、自覚するのです。その物自体になる事です。それを「此の身心を以て、直に仏を證す」と言われたのです。

人々分上豊に具われりと雖も修せざるには現れず、証せざるには得ることなし。この実証です。とにかく命懸けで坐禅した暁の話です。「坐禅は行證を左右にす」です。勇猛と味劣と動と容とを問わず、我々の働きそのもの一つ一つ、一瞬一瞬のこの様子のままに成り切つて、自己無きを期すのみです。

徹し切るまで努力するのです。

「是れ承当なり。」

この努力を怠らねば、確かに疑い得ようのない端的に行き着くのです。身心一如に目覚めること、是れを承当といつのです。仏祖の心胆をえぐり取り、決着する事です。

「所謂従来の身心を回転せず、」

所謂従来の身心とはこの身心です。悟る前、何も知らなかった従来の有り様。環境もそうです。承当とは従来そのまま、変わった事は何一つ無いと決着することです。悟っても耳は耳。目は目。舌は舌。手は二本。鼻は縦にあつて、その上に目が横に連なつてある。ありのままと言つ事です。ただ知らない者が、別に何か有りそうに思つて自分が迷つのです。その事を自ら知らないだけだと言つ事です。

「但だ他の體に随ひ去るを、直下と名くるなり。承当と名くるなり。」

他の證と言つのは、縁のことです。本より縁は自己の無い事を証しているからです。縁に従つて自在に作用している。そのものを円満現成しているではないか。縁に随ひ法に随ひ去つて、何も跡形が無い、一切皆空を証しているではないか。是れを直下と名くるのだと。洞山大師曰く、「如是の法、仏祖密に付す。汝今是れを得たり」と。目に色々方面がある。それらを認めたら「隔たり」を起して法に背く。縁の俛は目と方面と一枚であり、一心同化でその物自体です。ここを「但だ他の證に随ひ去る」と言い、この端的を「直下」と言つたのです。坐つてない人、前後が切れた事のない人は、他をどうしても自他の他としか思えないでしょうが、縁の俛と言つ意味です。自分というもののない有りの俛の様子を、他の證に随ひ去る、と説き去つた道元禪師は流石です。隔てのない様子を直下とも承当とも端的とも言うのです。

「唯だ他に随ひ去る、」

さつきは「但だ他の證に随ひ去る、」ここは「唯だ他に随ひ去る」。ますます、その俛その俛です。吐いて見よ、吸つて見よ。他に何があつたか。言いようが無いであるつと。その物それだけ、「今」「今」「今」です。箒を握つたら箒と一つ。掃く時は掃くのみ。もっと端的に言えば「只」「只」です。箒も無く人も無い。是れを「他に随ひ去る」と言つたのです。引つかかる何物もなければ、解決しようとしていたり求めたりする必要は無いではないか。だつたらそれでいいじゃないか。なぜ探すんだ。何故迷うんだ。何故問題にするんだ。だつたら真面目に「只」「只」しておればそれで良いではないか。こつ言つたことです。名月雪を抱いて清し。

「所以旧見非れぬなり。」

だから、昔のまんまで、ちつとも違つちやいない。悟る前も、このまんま。悟つてみても、このまんま。やっぱり梅干しは酸っぱい。やっぱり喉が乾いた時には、水を飲むしかない。あちらへ行く時にはやっぱり立つて歩くしかない。「飯を食べる時には、やっぱり、お膳に着いて、箸を持って、口で食べるしかない。そうだそれしかないんだ。それでいいんだ。それは本来の事、「今」の事で、決して分かる分からだと言つた意識や觀念の世界ではない。故に旧見も新見も無いのです。即今に功夫無し。「只」の努力を怠らねば良いのです。

「唯だ承当し去る。」

「只」を本當に体得すればよいことだ。他に仏法は無い。「只」坐禅する。「只」呼吸する。「只」掃く。「只」見聞覚知し去れ。見る時、眼有りや又無しや？ 端的咬む時、齒先ず滅ぶ。問う、承当し去って後如何？ 昼は夜に非ず。

「所以に新業に非ざるなり。」

前の「所以に旧見に非ざるなり」に對をなして、だから特別な事ではないぞと。蛇足は既に前述しています。是れが結論です。「道」「法」は本来変りようがない。だからそれ以外の新しい事や尊い事などが有る筈がない。

では、未悟の者はどうすればいいのかです。この俛で悟っていると言われても、既に仏だと言い切られても、却って困惑して、詭弁で人を愚弄するのか！と言いたくなる筈だ。

しかし仏や仏祖に嘘も詭弁も有ろう筈がないではないか。兎に角祖師方が揃って断言しているのだから、衆生が疑ってどうするのだとなるでしょう。そこで祖師の一句一句は見逃してはならないのです。

この章に於いても、洩らさず説き尽くされています。「右、身心を決択するに、自から両般あり。参師聞法と、功夫坐禅となり。」から始まり、「尚ほ一を捨てて承当すべからず。・動也た容、此の身心を以て、直に佛を證す、是れ承当なり。・但だ他の證に随ひ去る。・唯だ他に随ひ去る。・」完璧ではないですか。全くその通りですから。

分かりやすく言えば、「どうもしなくていいから、何事も没頭し徹底して我を忘れてしなさい」と言う事です。仏祖もそうしただけです。既に仏祖と同じ事をしているのだから、何も心配をするなど。之が承当です。徹したらその消息がはつきりするから、「今」「只」を本當に練りなさい、と言うのが結論であり、「唯だ他に随ひ去る」事の大切さを示されたのです。その中心となるのが只管打坐です。静かな部屋で、ただ、端坐をし、ただ、一息一息を素直にしておればよいのです。

道元禅師が一番願っている事は、この正法を護持する事です。その為にはまず菩提心が無くては駄目です。菩提心とは努力心であり求道心です。如何にしても自分を濟度するのだという決意です。その決意が本當なら正師を探して、法を良く聞きなさい。この「道」「法」を得るには参師聞法と只管打坐の絶対要素が必要だから、どうしても正師に聞法しなければいけない。

そして同じく大切な事は、正しく行ずる事です。

何を、どのように行ずるのか？ そこで最後の章に於いて熱誠を振るわれたのです。即ち、既に仏祖と全く同じ事を日々しているのだから、素直に信じ切って「今」「只」しなさい。外に何もしちや駄目だぞと。是れが既に直下承当です。「只」歩く。これが直下承当です。もうこれ以上、修行の仕様が無いのです。

空寂となり虚になってきますから、その俛我を忘れ、任せて、空しく時を過ごしなさい。虚しくと言うのは、時も自分の事も一切見ない事です。それが一日であるうと一週間であるうと一年であるうと関係なく過ぎ去る事です。

本當に徹し切った時に、法の方からやって来る。証が訪れるのです。これで良しという決着をつけてくれるのです。だから「今」「直下」に、即任せ切れば、即承当するぞと。これが道元禅師の心中です。是れが結論なのです。

「この締めくくりに当たって、一つ皆さまに、直下承当をして、いただきたい。

「はい、これ何ぞ。」(老師パンと柏手を打つ)(問髪を入れず大衆もパンと)是れが直下承当です。徹

して自己無きに到る迄努力を惜しまぬ事です。これで我が宗祖道元禅師のものされました「学道用心集」の提唱を閉講致します。無事円成を仏祖と共に大いに喜ぶところであります。

閉講の偈

珍重無門之門。

珍重ちんぢゆうす無門むもんの門。

誤放過只隨聞。

誤まちがつてただ隨聞ずいもんすることを放過ほうかす。

從縁不見言詮。

縁えんに従したがつて言詮ごんせんを見ざれば。

曹溪一滴芬芬。

曹溪そうけいの一滴いつぱく芬芬ふんふんたり。

大切な事は、一切の持ち物を捨て尽くして、何も無い無念の念を守ることである。

多くは誤つて是の大切なところを聞き取り損ねている。

素直に縁に従つて自己を持ち出さなければ、言葉などに囚われる事はない。

六祖から道元禅師へと、祖師の心印は此処に於いて真に伝統して芬ふん芬ふん限りだ。

平成十七年十月十五日

希道 合掌

茶礼会

世話人・・・ 老師に何か質問がある方いらっしゃいますか？ ご遠慮なく。

老師・・・ 今日遠く大分からお見えになった方がいらっしゃると聞きましたが？ あなた方お二人。それは遠い所わざわざ。大変でしたね。

参禅者A・・・ 私は主人に付いてきただけで、坐禅には興味が有りません者で。でも今まで誘われ言われるままに一緒にずっと坐禅してきました。意識的に吸って、意識的に吐いて。この事をずっとやっていたんですね。そうしましたら此処で先生が、その意識的な事は全て取り除いて「只」「一心不乱にして下さい」と言われた時、何か本当にずっと透明な者が入ったというか、それが不思議なまでに楽で、また嬉しく思いました。一心不乱に「只」「しましたら本当に楽になりました。今日は本当に有り難う御座いました。

老師・・・ 貴女は微妙な所を、たった一回で理解したようです。その気付きはとても大切な急所ですよ。今日貴女のした方法が、本当の修行に成るか否かの微妙な所ですから。初めは猛く心念が紛飛して、全く取り留めが付きません。だから最初のここで諦める人は多いのです。

この拡散し騒ぎ廻る心をどうするかで、大変苦勞します。それで諦めてしまえばそれまでです、でなければ是れを乗り越えるしかありません。そこでどうするかです。

古来より最もピュラーなのが、心を一点に置く。この方法です。色々効果的な方法が有りますが、要点は殆ど「心を一点に置く」事にあります。釈尊が御自分の息子ラゴラに授けた「息念の法」がそうです。聡明で知性の走りが早いだけ想念思惑に翻弄され苦しむ。この事を熟知していた釈尊は、「吐く時、吐くと自覚しなさい。吸う時、吸うと自覚しなさい・・・」と教えています。つまり、「今」の事実を認知確認する事で拡散を防止し、作用している身体に心を接近させ同一化を目指したのです。真面目

な彼は、遂に一隻眼具したようです。

各祖師方の説き方、心の置き所こそ違いますが根源は同じです。公案禪の「無字の公案」もこれです。「ム」を引つ提げ、拈提し続けるのです。ムに身も心も預け切るので。親鸞聖人の「一向の念仏」も同じです。食べる事も寝る事も忘れて、ひたすら念仏に成り切れと言つ教えます。いずれも真面目に信じて一心不乱に行ずれば、やがて心意識・念想観の支配から脱して身心一如に治まるのです。要約すれば、何でも良いからその事だけに成り切る。「今」その事のみに徹するのが眼目です。

拡散すること甚だしく、片時もじっとしていない初期状態では、呼吸を意識して片時も離さぬ事が第一です。心の全てを傾注して呼吸を守るのです。とにかく呼吸に心を縛り付けることによって、攪乱散漫する癖を収めていくのです。治まっていく理由がちゃんとあるので、この方法は道理として確かなのです。

拡散も自分だし、自分の心ですから、一つ事に全力投球していると拡散の余地がしだいに無くなっていくのです。ここが道の有り難い所です。道は真実であり真理であり純粹ですから、本より一つしか有りません。だから真面目に真剣に一つを守り通すことです。その努力をしていると、不純物である雑念や煩惱の本、つまり拡散する心の癖が取れていくのです。治まってくるに従つて嘘のように、呼吸を意識していた意識が無くなるのです。つまり自然の呼吸が出来るようになるのです。それだけ楽になり清らかになるのです。

呼吸は本来身体がしていて、拡散もなく煩惱も無い純粹な作用であり事実です。真理そのものです。ですからこちらの癖を取り純粹になれば、自然に真実になるのです。本来しておる呼吸に、只心が着いていっておればよいと言つ事です。

この一点に手が届く迄が辛いし、可成り努力が必要なのです。貴女はいきなりそれが出来たのですから、何と恵まれた因縁の持ち主か。求道心が無いのにいきなりそれが出来るといふのは稀な事です。でも、本来誰もが道の真つ只中、「今」に居るのだから、ただ素直に言われた通りを実行すれば、実はみんなそこへ行き着くように道は成つてはいるのです。が、純一になかなか成れないから苦勞するのです。貴女に菩提心があつたら、もっと深く大きな気づきがあつたらうと思えますよ。

同じ事なら、よし私も努力して体得し、安らかな人生を送つてやるう、という願望を持って欲しい。ある意味では、高い理想の欲を起こすことですよ。家で坐禅する時も、何心も無く、素直に「只」して下さい。本来に任せ切るので。あなたは好因縁の持ち主ですよ。本気でやりなさい。

世話人・・今日の提唱で、参師聞法は非常に大切だという話がありました。先ず正師しよしに会い、正法しよほうを聞きなさい。そして一生懸命修行しなさいと言つ事でした。この正師に会う、正法に会うためには、初めての人達からすればどれが正法で、どれが正師なのかというのはなかなか、判断がつきずらいと思えます。宗教も色々あり、禅に於いても色々な説き方が存在しています。そこで正法と正師とを、如何にして見分けるか。この点を少しお話し頂ければと思います。それに合わせて、邪人正法を説けば、正法却つて邪法となり、道人邪法を聞けば、邪法却つて正法となる、と聞いております。これも合わせてお話し頂ければ有り難いのですが。

老師・・初問の、正師をどう見分けるか。道元禪師は明確に、「行解相応ぎょうげさうおう」と「越格あつぐの力量」を具していなければならない。このように言つて居られる通り、その人の全分が法だから、している俣を説き、しているそれ自体を分からせる為に説くのですから、行解相応していなければならぬ道理があるでしょう。相応しないと言つ事は、理だけが宙に浮いて先行していることになります。つまり考えた作り物の法と言つ事です。道徳家は言行一致している事が基本ですから、生活態度全般が綺麗です。となるとそれで「道」「法」の人かと言えば、「繋つなげる駒こま、伏ひくせる鼠ねずみ」です。内に騒ぐ者が有る。自己が有

ると言う事です。当然引つ掛かる、囚われる。つまり迷い葛藤からは免れ得ていないのですが、闊達自在にしている道人より立派に映ります。特に禅僧は自由が利き過ぎて、破天荒に及ぶ事があります。法の人が法を汚す事になるのです。昔より多少の道力を得た者に多く居ます。本当の法でない証拠です。だから行解相応が正師の条件なのです。

普通の目から判断すると、道徳家の方が立ち振る舞いが立派に見える為、間違っしてしまいます。そこで「隔たり」の無い心、即ち越格の力量がなくちゃならないのです。

越格の力量とは何か？ 是れが見て取れるなら間違わないのですが、越格の力量だから、観る人にそれだけの力量が無い限り見ぬけません。間違えるのはその為です。とても見えない、分かる筈がないのに、理解し見抜いたつもりになる危険。とても多い事です。師の言われる事、示される事、行為などの大切な要点は、相手が大き過ぎるだけに分からないものです。だから大変危険であり間違った見方をしてしまうのです。目に衝く者は自分が入らないその人の欠点ばかりです。又、見る力も無い人の批判に染まったりするのです。それだけでも法から遠いのですが、そのことも分からないのです。自我とはそれ程に心を汚しているのです。

無色の人は透明であり拘り無く自在です。気にする事もなく個人的に「道」「法」のままです。囚われの目には何とも矛盾に見えたり、法と違って映ったりするものです。ですから不遜極まりない批判中傷をしてしまうものです。その危険を知っておく事です。

道元禅師は大法を尊んで、「仏の言わく、無上菩提を演説する師に値はんには種姓を観ずること莫れ、容顔を見ること莫れ、非を嫌うこと莫れ、行いを考ふること莫れ。ただ般若を尊重するが故に日々三時に礼拝し恭敬して更に患惱の心を生ぜしむること莫れ」と看破引導されています。この心が大乘精神です。

それはそうとして、絞り込み見極めるにはどうすれば良いかです。本当の師は自分が努力して体達していますから、その様子全般が分かっています。煩惱の実体から起こる根源から、それらが全く無害な者だと言う事から、囚われる原因からその解決策まで。要するに本当に自分が分かっっており、本当の法が分かっているということです。ですから拝聴しているだけで浄化されます。又、明解な具体的方法を教えてくれます。どしどし疑問質問を呈する事です。その度に心の縫れが溶けていきます。法だけに目を向けて、個人的個人的な人柄や行状等を見ない事です。直ぐ囚われてしまう拘りの目ですから、見ると内に矛盾を起こすのです。

法の人は誠実で温かく真面目なのですが、どうあっても法が第一ですから、法に於いては厳しいです。ところが学人は何が法であるのか、法でないのが分かりません。どうして、何故叱るのかさえ理解し兼ねます。それに加えて時には冷酷です。何しろ櫂の棒で公然とぶん殴るを常套手段にして、而もその事を公然と既成化し認められている世界です。矛盾から不審感さえ抱いている者に執行するのです。法を得させ、大自在の人に導こうとする越格の力量とは、そうして絶大な信念で、しかも自在に作用しますから凡眼では遙かに届かないのです。そうした法に厳しい師を選べば良いのです。無闇に荒いから良いというわけではありません。法に妥協も曖昧さもい加減さもなく、口に法を自在にし、指導が厳格な程良いのです。

正師は理屈を云わないのです。この典型が趙州禅師です。嚴陽でしたかね、後に趙州録を編纂されるんですが、僧林に入ったばかりで未聞在です。「修行はどうしたら宜しいのでしょうか」と素直に尋ねたら、大善知識趙州は、「粥を食ったか」と。理屈がないでしょ。正直に「食べました」。「ならば鉢を洗え」。事実丸出し、真実そのままでしょう。他に法が無いと言っ事を端的に示したのです。そうしたら早くも嚴陽は、その大切な法、即ち即今底に気がついたのですよ。頭で求めていく世界ではない。

「今」の事実を本当にしていたら良い、それが修行なんだといきなり急所に気が付いたのです。もう占めた者です。趙州古仏は、彼は器だと思つたに違いないのです。果たせるかな、これが跡継ぎになつたでしょう。だからだから私の様に説明しまくるのは良くないのですよ。分かせてしまつてそれが災うからです。みなさん多聞多知にならぬよう気を付けて下さい。

何はさておいても、本当に坐禅しなければ駄目なのです。しかし聞く時は一生懸命「只」聞く事です。分かつた事や聞いた事を貯め込んだら怪我をするので、「只」聞いてそのまま素通りさせることです。この事を教えてくれる人ならば正師です。

纏めて言えば、法を得るには参師聞法と坐禅并道が絶対必要であること。聞く時は無心に「只」聞くこと。行ずるに当たっては素直になり、心を一点に置いて単純になること。或いは、心を空っぽにして一切を無視すること。大切なこれらの要点を力説し、それらの道理を明解に説得出来ること。そして最も大切な菩提心を駆り立ててくれる師であれば間違ひありません。

正法も邪法の件。説き方聞き方によって正法が邪法、邪法が正法になるのは、正邪は人に有つて他に無い証です。人とは心です。心が正しければ、説いても聞いても全て正法です。正しい心とは「只」です。純粹で隔てが無いことです。「只」の心で「只」を説く時、悉く正法です。自分の様子を有りの俚に説くだけです。間違えようが無いのです。

「只」聞く時、一切の分別無しですから、間違つたり迷わされたりしないのです。聞く俚ですから、それ自体です。正邪を超えているのです。意図して悪口を言つたとしても、耳を過ぎる音ですから一向に汚されないし、言葉の外に居ますから引つ掛からないのです。聞く俚が法ですから、正法そのものです。邪心の俚意図して正法を説くと、この逆です。自我によって汚れた俚です。だから言葉は正法であつても、とても真実が分かつてはいないからです。己見を以て法を説く事は最も宜しくないのですが、己見を以て法を聞く勿れ、ともあつたでしょう。どちらも正法を汚して邪法となるが、「只」の心で在ればどちらも正法となるのです。

支那の話です。詐欺坊主が邪法を説いたが、「只」素直に聞いて「只」実行した為に悟つたと言つ事例もあるのです。邪法で法を得たのではなく、真実に聞く事によって正法になつていたのです。だから「道」「法」を得られたのです。純一である事が法なのです。だから何事であろうとも真面目に「只」することです。その物自体に成る時節が必ず有ります。徹すれば必ずから「隔たり」が解けて落ちる様に成っているのです。本来「道」「法」でないものは無いのですから。何処までも何処までも、潔く心を空っぽにし、今はこれだけと決定して「只」するのです。安住する時、即その物自体です。これが邪法であっても正法になると言つ事です。とにかく純一にやる事です。よろしいでしょう。か。

世話人・・・良く分かりました。有難うございました。

平成十七年十月十五日